

－ 令和6年度全国学力・学習状況調査 －  
**気仙沼市の結果概要と今後の対応について**

### 1 調査の目的

- ・ 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・ 学校における学習指導の充実と学習状況の改善等を図り、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2 調査の概要

- (1) 調査実施日 令和6年4月18日(木)
- (2) 調査対象 小学校第6学年全児童(12校:332人), 中学校第3学年全生徒(9校:352人)
- (3) 調査内容
  - ・ 教科の学力に関する調査(国語, 算数・数学)
  - ・ 生活習慣や学校環境に関する質問紙調査(児童生徒対象, 学校対象)

### 3 調査結果の概要

#### (1) 教科の学力に関する調査結果

##### ① 平均正答率とその推移

小学校正答率(%)		気仙沼市	宮城県 (仙台市を除く)	全国	宮城県とのかい離 (ポイント)	全国とのかい離 (ポイント)
国語	R6	67	65	68	2	-1
	R5	63	65	67	-2	-4
	R4	62	62	66	0	-4
	R3	61	62	65	-1	-4
	H31	62	61	64	1	-2
算数	R6	60	57	63	3	-3
	R5	55	58	63	-3	-8
	R4	56	58	63	-2	-7
	R3	65	66	70	-1	-5
	H31	63	64	67	-1	-4

中学校正答率(%)		気仙沼市	宮城県 (仙台市を除く)	全国	宮城県とのかい離 (ポイント)	全国とのかい離 (ポイント)
国語	R6	54	55	58	-1	-4
	R5	68	68	70	0	-2
	R4	70	68	69	2	1
	R3	66	63	65	3	1
	H31	72	71	73	1	-1
数学	R6	45	46	53	-1	-8
	R5	45	44	51	1	-6
	R4	43	45	51	-2	-8
	R3	55	52	57	3	-2
	H31	58	55	60	3	-2

\* 令和2年度は新型コロナウイルス感染症のため未実施。

\* 参照数値は、「文部科学省令和6年度全国学力・学習状況調査 調査結果」(WEBシステム),

「宮城県教育委員会HP 令和6年度全国学力・学習状況調査結果」による。

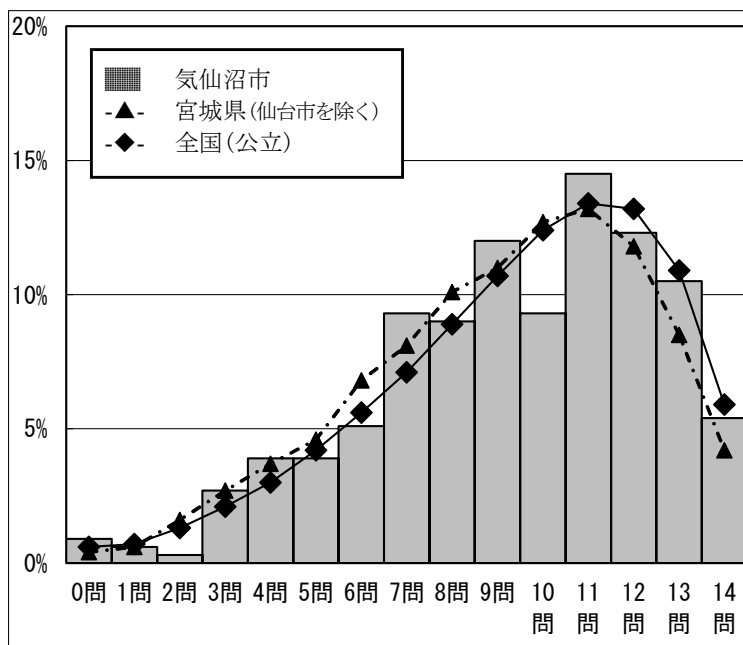
② 教科の学力に関する調査結果のポイントと対策

ア 小学6年生国語

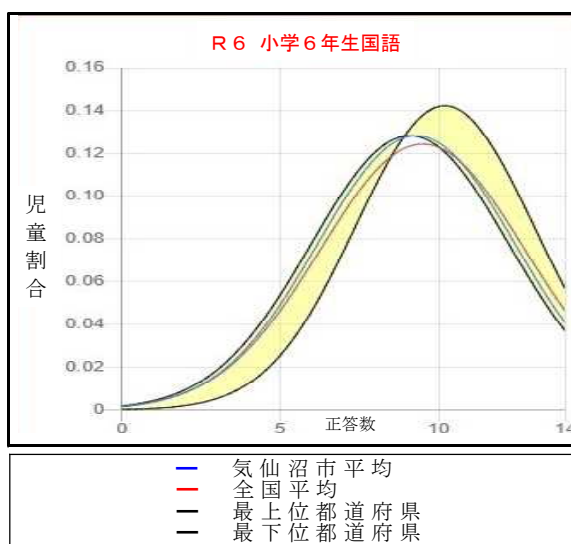
分類	区分	平均正答率	学習指導要領の内容						問題形式		
			知識及び技能			思考力、判断力、表現力等			選択式	短答式	記述式
			(1) 方言に 関する 特徴や 使い	(2) 情報の 扱い方 に関	(3) 我が国 の言語 文化	A 聞くこ と・	B 書くこ と	C 読むこ と			
小学校 国語	気仙沼市	67	63.7	84.6	80.7	53.3	70.3	71.4	68.2	58.1	68.2
	宮城県	65	60.5	84.7	74.4	55.8	65.9	70.1	67.5	54.6	63.2
	全国	68	64.4	86.9	74.6	59.8	68.4	70.7	69.9	59.7	64.6
	気仙沼市ー全国	-1	-0.7	-2.3	6.1	-6.5	1.9	0.7	-1.7	-1.6	3.6

※「宮城県」のデータは、仙台市を除くデータ(以下同様)

【正答数分布グラフ】(横軸：正答数 縦軸：割合)  
設問数14問(全国平均正答数9.5問, 市平均正答数9.3問)



【平均ゾーン\*】(横軸：正答数 縦軸：児童数割合)



\*全国学力・学習状況調査・平均ゾーンシステム  
([https://ds-efa.info/data\\_analysis/](https://ds-efa.info/data_analysis/))を利用して  
分析した。(以下同様)

結果の ポイント	<p>① 正答数分布は全国に近い。正答数から上位・中位・下位層に分けて見た場合、各層ともに層内の下側が若干厚く、上側が若干薄い。</p> <p>② 出題内容から見た特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>情報の扱い方に関する事項(情報の分類・関連付け・発信の検討)に課題がある。</li> <li>読書の有用性についての言語文化に関する設問や記述式問題は良好である。</li> <li>物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができている。</li> </ul> <p>③ 平均ゾーン</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>平均ゾーン内にあり、平均的な学力を身に付けている。学力の散らばりは、全国よりもやや小さい。</li> </ul>
対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業改善が成果として表れてきているが、協働的な学習による思考力養成を強め、個別最適な学習の精度を高める必要がある。</li> <li>A Iドリルの活用により、児童の状況に応じた学習の支援を行う。</li> <li>目的に応じて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する指導を充実する。</li> </ul>

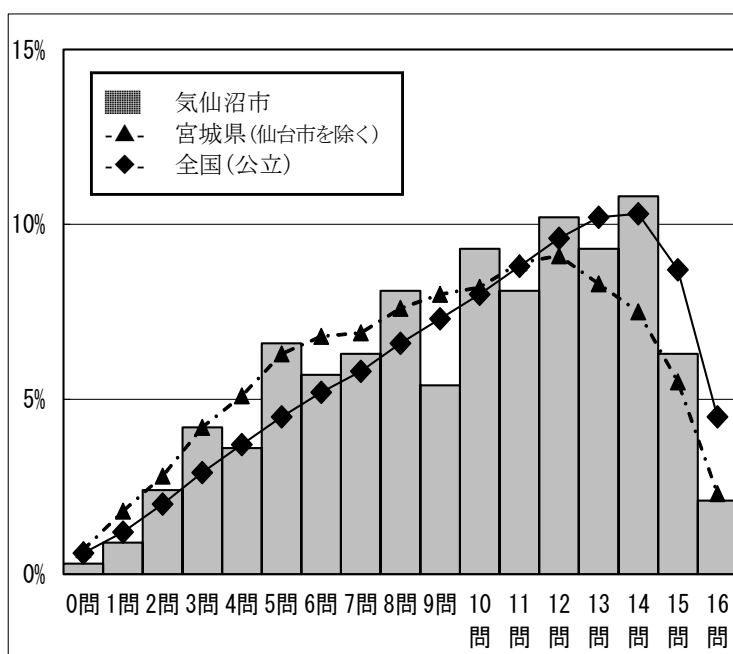
\*平均ゾーンシステムについて

各学校や教育委員会の個別の平均正答分布が、全国の平均的な分布からどのくらい離れているか、近いかを可視化するシステムである。都道府県の最上位と最下位の間(黄色の領域)に分布していれば、平均的な学力を身に付けていると判断する。学力の散らばりの程度も確認できる。(宮城教育大学教職大学院 田端健人教授ら研究チーム)

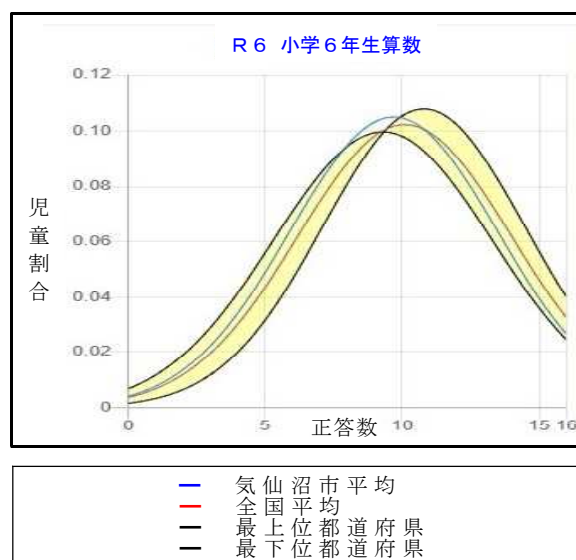
イ 小学6年生算数

分類		平均正答率	学習指導要領の領域				問題形式		
			A 数と計算	B 図形	C 変化と関係	D データの活用	選択式	短答式	記述式
区分									
小学 算数 校	気仙沼市	60	62.4	65.5	45.7	60.6	72.6	59.5	46.7
	宮城県	57	59.1	62.2	43.5	56.4	70.4	55.4	43.9
	全国	63	66.0	66.3	51.7	61.8	75.3	62.0	51.0
気仙沼市－全国		-3	-3.6	-0.8	-6.0	-1.2	-2.7	-2.5	-4.3

【正答数分布グラフ】（横軸：正答数 縦軸：割合）  
設問数16問(全国平均正答数10.1問, 市平均正答数9.7問)



【平均ゾーン】（横軸：正答数 縦軸：児童数割合）



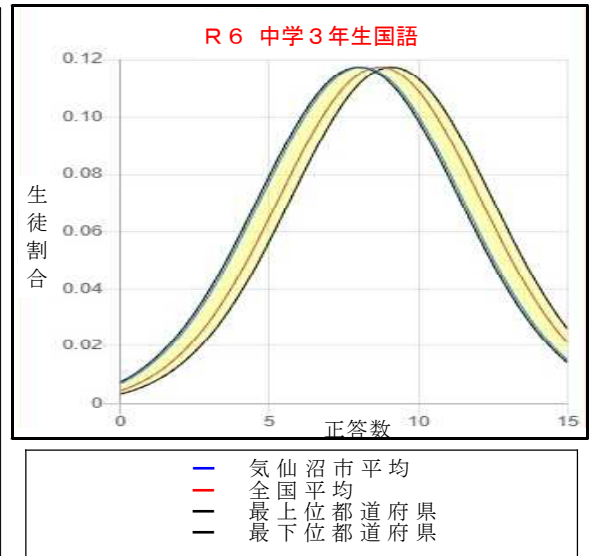
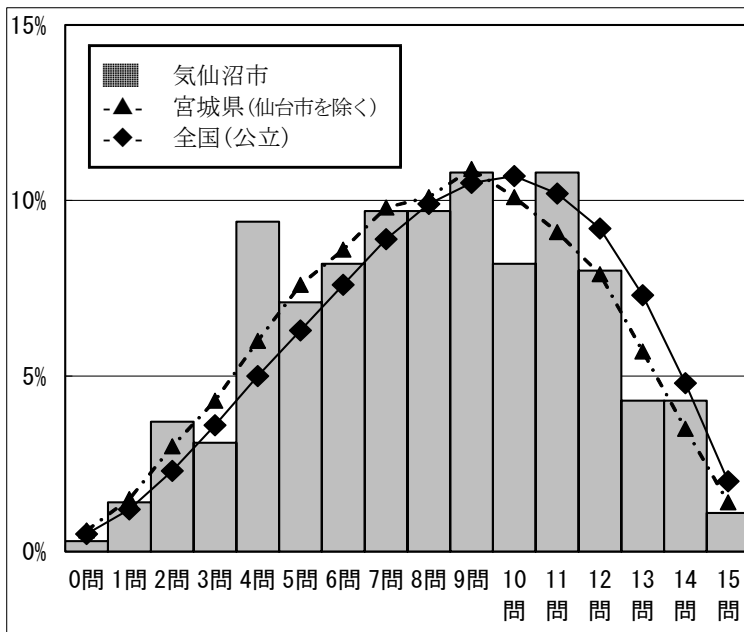
結果のポイント	<p>① 正答数分布は、全体的に正答数が少ない側にシフトしているものの、全国分布と同様の傾向である。正答数の最上位層が薄く、中位層下部がやや厚い。</p> <p>② 出題内容から見た特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道のりと速さと時間に関する「変化と関係」の事項、記述式問題に課題がある。</li> <li>・計算の仕方の事項は概ね良好である。</li> <li>・全体的に無回答数が少なく、粘り強く問題に取り組むことができている。</li> </ul> <p>③ 平均ゾーン</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平均ゾーン内にある。しかしながら、上位層が少ない。学力の散らばりは、全国より小さい。</li> </ul>
対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題文の数量関係を図や数直線によって理解し、立式するよう指導する。</li> <li>・数学的な考え方を高めるために、個別最適な学習として、自力解決に当たる時間を十分に確保した上に、考えを伝え合って集団で課題を解決する機会を充実する。</li> </ul>

ウ 中学3年生 国語

分類	区分	平均正答率	学習指導要領の内容						問題形式		
			知識及び技能			思考力, 判断力, 表現力等			選択式	短答式	記述式
			(1)	(2)	(3)	A	B	C			
			方言に関する事項や使い	す情報の扱い方に関	に我が国の言語文化	聞話すること	書くこと	読むこと			
中国語 中学校	気仙沼市	54	52.7	58.5	79.3	54.4	62.4	42.3	58.4	56.8	38.4
	宮城県	55	53.9	56.2	74.9	56.0	62.3	44.7	58.0	58.5	40.9
	全国	58	59.2	59.6	75.6	58.8	65.3	47.9	61.0	61.8	45.5
気仙沼市ー全国		-4	-6.5	-1.1	3.7	-4.4	-2.9	-5.6	-2.6	-5.0	-7.1

【正答数分布グラフ】(横軸：正答数 縦軸：割合)  
設問数15問(全国平均生徒数8.7問, 市平均正答数8.1問)

【平均ゾーン】(横軸：正答数 縦軸：生徒数割合)



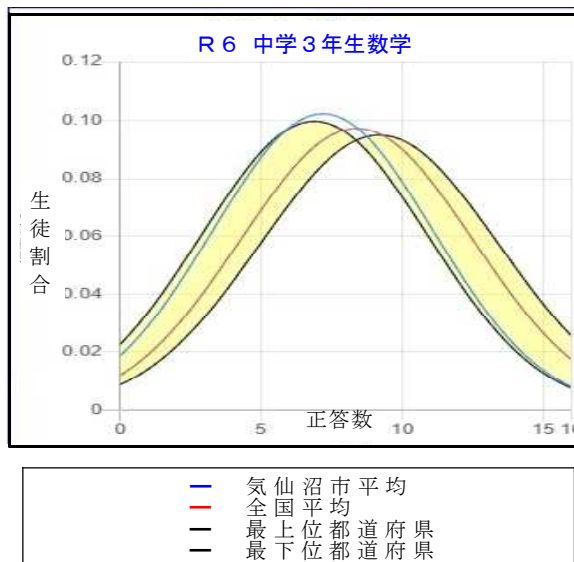
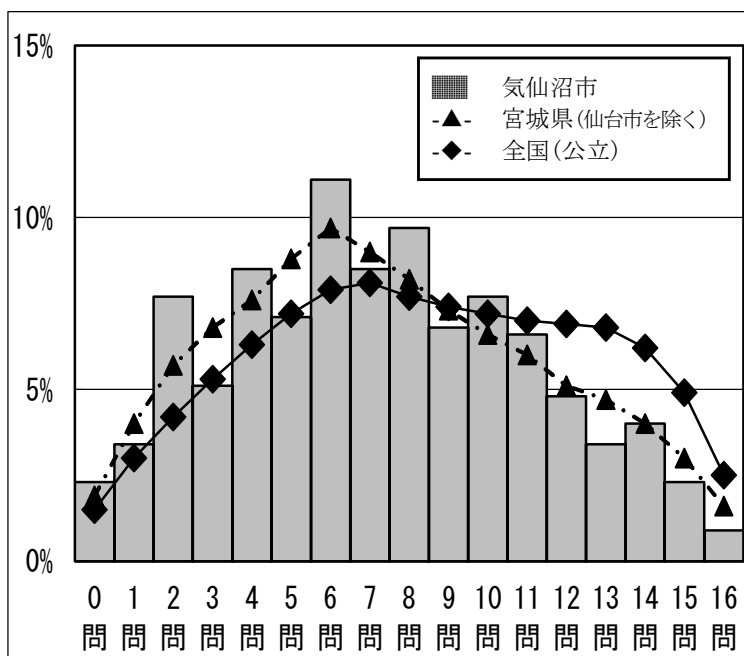
結果のポイント	<p>① 正答数分布は、全国値から全体的に正答数が少ない側にシフトしている。正答数の上位層が薄く、下位層が厚い。</p> <p>② 出題内容から見た特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・修飾語と被修飾語の関係等、文の成分の理解、目的に応じて必要な情報に着目して、不足なく要約すること、記述式問題に課題がある。</li> <li>・必要に応じて質問しながら話の内容を捉えること、行書の特徴を踏まえた書き方については概ね良好である。</li> </ul> <p>③ 平均ゾーン</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平均ゾーンの下端曲線上にあることから、課題はあるものの、平均的な学力は身に付けていると捉える。学力の散らばりは、全国と同等である。</li> </ul>
対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知識伝授型の授業から脱却できていないことを推定させる結果である。学習課題を自己認識し自力で考える時間及びそれを伝え合う時間を十分に確保するところから始めなければならない。</li> <li>・話し合いの中で、課題を意識して話したり聞いたりすることや、互いの発言を結び付け、話し合った内容を踏まえて自分の考えをまとめられるように指導する。</li> </ul>

エ 中学3年生 数学

分類		平均正答率	学習指導要領の領域				問題形式		
			A 数と式	B 図形	C 関数	D データの活用	選択式	短答式	記述式
区分									
中学校 数学	気仙沼市	45	38.2	34.2	57.1	50.6	55.7	57.9	19.8
	宮城県	46	43.1	34.7	56.7	49.3	54.0	60.6	22.0
	全国	53	51.1	40.3	60.7	55.5	58.5	67.0	29.3
気仙沼市ー全国		-8	-12.9	-6.1	-3.6	-4.9	-2.8	-9.1	-9.5

【正答数分布グラフ】（横軸：正答数 縦軸：割合）  
設問数16問(全国平均生徒数8.4問, 市平均正答数7.2問)

【平均ゾーン】（横軸：正答数 縦軸：生徒数割合）



結果のポイント	<p>① 正答数分布グラフは、全国と異なっており、正答数が少ない側に偏った正規分布に近い形となっている。上位層を伸ばしきれず、下位層が厚い。</p> <p>② 出題内容から見た特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・式の変形など、基本的な数と式に関する知識・技能、確率など概念に基づき数学的な考え方を深める事項、数学的な表現を用いた記述式問題に課題がある。</li> <li>・与えられたデータの読み取りや比較は概ね良好である。</li> </ul> <p>③ 平均ゾーン</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平均ゾーン下端にあり、課題があることが分かる。中位層上部から上位層にかけて、割合が下がっている。学力の散らばりは、全国より小さい。</li> </ul>
対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎的な知識・技能の習得への早急な対策が必要である。そのために、学習者主体の授業への転換、個に応じたつまずきの分析による学び直し、個別最適な学習としてのAIドリルの効果的活用に取り組む。</li> <li>・問題解決の過程を数学的な表現を用いて説明することに困難がみられる。問題解決する場面を設定し、表、式、グラフなど数学的な表現を用いて説明できるように指導することが大切である。課題研究等においてそれを進めたい。</li> </ul>

(2) 生活習慣や学校環境に関する質問紙調査結果

① 回答結果とその推移

同一児童生徒群の変化

質問		尺度	小学6年生						推移	中学3年生								
			H31	R3	R4	R5	R6			H31	R3	R4	R5	R6		変化		
			本市	本市	本市	本市	本市	全国	全国比		本市	本市	本市	本市	本市	全国	全国比	
生活一般	① 朝食を毎日食べる割合(毎日+どちらかといえは)		97.0	97.5	95.0	96.1	92.4	93.7	-1.3	▼	94.6	92.9	94.5	91.5	93.4	91.2	2.2	▶
	② 1日当たりのゲームの時間(3hr以上)		-	28.5	33.8	-	28.4	30.3	-1.9	▶	-	27.5	24.1	-	26.1	29.0	-2.9	▶
	③ 家にあるおよその本の冊数(101冊以上)	経	-	31.7	20.2	26.9	27.5	31.9	-4.4	▼	-	42.2	36.1	35.2	30.0	20.3	1.7	▼
学校生活	④ 自分にはよいところがあると思う	徳	75.3	73.4	76.5	81.6	80.1	84.1	-4.0	▷	66.0	69.0	71.9	75.0	82.8	83.3	-0.5	△
	⑤ 学校に行くことを楽しみに感じる	徳	89.8	90.6	83.8	84.4	86.8	84.8	2.0	▶	79.1	82.4	86.7	82.5	85.1	83.8	1.3	▷
	⑥ 人の役に立つ人間になりたいと思う	徳	94.6	97.0	95.3	96.3	97.7	95.9	1.8	▷	93.4	96.4	97.7	95.3	94.5	95.2	-0.7	▷
学習一般	⑦ 先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う		83.0	-	81.2	86.7	91.8	89.9	1.9	△	77.1	-	89.0	87.4	92.3	90.4	1.9	△
	⑧ 授業は自分に合った教え方、教材、学習時間になっている	探	-	87.1	74.9	78.5	87.1	84.3	2.8	▷	-	77.8	82.5	77.7	84.8	80.9	3.9	▷
	⑨ 課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだと思う	探	78.6	82.5	76.6	78.5	83.4	81.9	1.5	▷	71.9	80.0	81.5	82.9	84.8	80.3	4.5	△
探求的学習	⑩ 資料や話の組み立てを工夫して発表したと思う【発表】	探	65.0	72.3	69.9	66.9	74.0	67.6	6.4	▷	51.4	73.0	77.4	71.9	77.4	64.8	12.6	▷
	⑪ 自分で課題を立て情報を集め整理し、発表する学習に取り組んだと思う【総学】	探	78.3	82.8	80.2	83.1	88.6	81.3	7.3	△	63.3	89.0	87.5	90.2	91.9	82.2	9.7	△
	⑫ 地域や社会の課題を自分なりに考える	徳	57.1	60.5	53.9	75.4	87.8	83.5	4.3	△	45.0	52.9	57.9	69.5	81.4	76.1	5.3	△
協働学習	⑬ 話し合う活動を通じて、自分の考えを深め、広げたと感じる	探	72.3	82.2	79.1	78.2	90.4	86.3	4.1	△	74.6	84.9	81.4	84.0	90.2	86.1	4.1	△
	⑭ 学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている	探	72.5	69.7	67.3	78.0	84.2	84.2	0.0	△	69.3	84.2	81.7	84.3	88.8	86.3	2.5	△
教科	⑮ 国語の勉強は大切だと思う	授	90.7	94.1	92.5	94.9	96.5	94.5	2.0	△	92.2	95.1	95.5	94.8	98.3	93.9	4.4	▷
	⑯ 国語の授業の内容はよく分かる	授	87.4	88.9	83.8	86.4	92.4	86.3	6.1	▷	77.0	82.7	88.7	87.6	86.0	82.7	3.3	▷
	⑰ 算数(数学)の勉強は大切だと思う	授	91.6	95.7	95.2	93.0	95.6	94.6	1.0	▷	85.1	85.9	88.2	87.6	88.6	87.2	1.4	▷
	⑱ 算数(数学)の授業の内容はよく分かる	授	87.4	87.6	80.4	77.7	83.3	82.1	1.2	▶	76.7	74.4	81.5	77.0	76.8	75.7	1.1	▶
家庭学習	⑲ 平日の家庭学習時間の増加(小1hr以上、中2hr以上)		80.2	75.0	67.0	61.6	58.5	54.6	3.9	▼	29.0	25.4	27.6	17.3	18.1	31.7	-13.6	▼
ICT	⑳ 授業でICTを使う程度(毎日)		7.9	7.8	24.3	26.0	24.0	25.3	-1.3	△	2.1	12.0	55.9	74.4	79.7	31.0	48.7	△

経：家庭の社会経済的状況  
徳：非認知能力「徳」  
探：対話・探究学習  
授：授業充実度

△：向上  
▷：向上傾向 ▶：低下傾向  
▼：低下

\* R 2 は新型コロナウイルス感染症感染拡大により、調査せず。

【結果のポイントと対策】

- 質問④の自己肯定感、質問⑦の教員による良さを認めることは向上傾向で、特に中学生で顕著である。質問⑮～⑱の授業充実度、質問⑤の学校に行くことを楽しみにすることも高水準で安定している。これら項目は相互に関連しているものと考えられ、児童生徒と教員の関係性を含めて、概ね順調な学校生活となっているものと考察する。
- 質問④、⑤、⑥、⑫は非認知能力「徳」を測るものとされるが、いずれも高水準を保っており、特に中学生で顕著である。また、協働的・探究的学習の指標とされる質問⑧～⑪、⑬、⑭は、小・中学生ともに向上を続けている。また、同一児童生徒の小→中学生での成長に伴う変化でも向上を示す項目が多い。市の方針である「認知・非認知能力の一体的向上」及び「協働的・探究的学習の推進」が児童生徒にも定着してきているものと考察する。
- 授業におけるICTの活用は、着実に進められている。学校によって個別の支援を要する現状、ICT活用によって自ら考えを書くことが軽視されがちな現状があり、その改善を図る。
- 授業改善が図られているにもかかわらず、それが学力指標の向上に結び付いていない。教員研修の充実、マイスター教員やAIドリル活用等により、各教科の見方・考え方を高める教員の指導力向上、個別最適な学習を進める授業改善、課題研究等と教科学習とのリンクを一層推進したい。
- 質問①の朝食を食べる割合は低下傾向で、特に小学生で顕著である。質問②の3時間以上のゲームは3割の児童生徒にのぼる。規則正しい生活習慣やメディアコントロール全般について、家庭の理解促進に努めたい。
- 家庭学習時間は小・中学生ともに顕著に減少を続けている。主体的な家庭学習につながる授業改善や家庭学習指導を進めるとともに、ICT活用との因果関係等を分析し、「書くこと」を弱めない学習を図りたい。

## 4 総合考察

### (1) 効果量 d による考察

本市-全国間の効果量 d の推移・小学 6 年生

紫色:  $d \leq -0.2$  緑色:  $0.2 \leq d$

尺度項目	R 3	R 4	R 5	R 6
①国語正答数	-0.169	-0.178	-0.179	-0.076
②算数正答数	-0.258	-0.280	-0.326	-0.141
③社会経済的状况	-0.135	-0.129	-0.170	-0.199
④非認知「徳」	0.145	-0.081	0.092	0.302
⑤対話・探究	0.039	-0.044	0.010	0.548
⑥国語授業充実度	0.231	0.026	0.044	0.084
⑦算数授業充実度	0.083	-0.106	-0.266	-0.127

本市-全国間の効果量 d の推移・中学 3 年生

紫色:  $d \leq -0.2$  緑色:  $0.2 \leq d$

尺度項目	R 3	R 4	R 5	R 6
①国語正答数	0.041	0.042	-0.098	-0.178
②数学正答数	-0.104	-0.357	-0.250	-0.285
③社会経済的状况	0.164	0.062	0.067	-0.142
④非認知「徳」	0.058	0.084	0.103	0.205
⑤対話・探究	0.283	0.203	0.202	0.525
⑥国語授業充実度	0.116	0.243	0.165	0.121
⑦数学授業充実度	-0.065	0.069	0.005	0.252

結果のポイントと対策

◆ 2つの集団の差は、平均値の差だけでは測れない → 効果量 d とは

2つの集団の比較で、右グラフのように、平均値の差が同じでも、集団内のサンプル分布グラフの重なりが小さいほど集団間の差は大きいと言える。このグラフの重なりを定量的に示す統計学的数値が効果量 d である。サンプルの数や分布の影響を受けにくく、より正確な比較ができる。

◆ 教育効果を図る上での一般的な効果量 d の目安

d には、下方への差を示すマイナス値、上方への差を示すプラス値がある。d の絶対値で示せば、

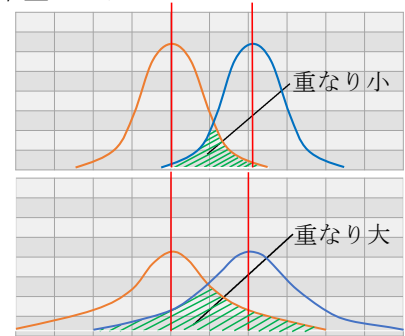
- $d \geq 0.5$  → 集団間の差は大
- $0.3 \leq d \leq 0.5$  → 集団間の差は中
- $0.2 \leq d \leq 0.3$  → 集団間の差は小
- $d \leq 0.2$  → 集団間に実質的な差はない

◆ R 6 の小学 6 年生では、

- ・教科の学力に関する調査による本市の正答数は平均ゾーン内にあり（既述）、上表の正答数の d ①、②からも全国との実質的な差はないとされる。
- ・質問紙調査から求めた上表の非認知能力「徳」の d ④、対話・探究学習の d ⑤が全国と比較して高く、かつ回答の散らばりが小さいことから、教科の正答数を押し上げていると解釈できる。。
- ・上表の算数授業充実度の d ⑦について、学力指標向上を図るために、日常生活と関連付けた、数学的な考え方を磨く授業改善が必要である。

◆ R 6 の中学 3 年生では、

- ・本市の正答数は平均ゾーンの下端に位置し（既述）、上表の国語 d ①では全国との実質的な差はないとされ、数学 d ②では小さな差が認められる。
- ・非認知「徳」の d ④、対話・探究学習の d ⑤が全国と比較して高く、回答の散らばりが小さいことから、教科の正答数を押し上げていると解釈できる。
- ・数学授業充実度の d ⑦について、意欲を持たせる授業になってはいるが、面白いと思わせつつも、数学的に考える力を磨く授業へと要求水準を上げる授業改善が必須である。



### (2) 今後の総合的対策

- 授業改善は着実に図られており、良好な学校生活につながっている。さらに、それを学力指標の向上に結びつけられるよう、現行方針の「認知・非認知能力の一体的向上」及び「協働的・探究的な学習」において、次の事項を重点として取り組む。
  - ・必要性を児童生徒が実感できる学習課題を共有し、課題を自分の力で考える場及び他者と共感しながら協働して考えを深める場を確実に設定する。
  - ・教員研修やマイスター教員による支援の充実によって、教科特有の見方・考え方を高め、思考力を磨く探究的な授業を構築する。
  - ・総合的な学習の時間の課題研究等と教科学習内容とのリンクに努める。
  - ・個別最適な学習を可能にする機会を、単元内に必ず盛り込む。
  - ・ICTを活用する授業を継続するが、自ら書く活動を確保する。
  - ・AIドリルは、学習事項の活用や学び直しの面から積極的に活用する。一方で、活用を児童生徒任せにせず、モニターによる活用改善を図る。
  - ・レジリエンスや自己コントロール力等の非認知能力を磨く機会を常に意識する。
- 「育てたい子供像」を家庭・地域とともに考え、その実現に協働して当たる。
  - ・学習面だけでなく、非認知能力の育成に関しても、積極的に共有する。それが、不登校やいじめ問題の防止にもつながる。
  - ・生活習慣の確立やメディアコントロールが必要である。
- 体験的な学習によるふるさと理解、英語学習、読書活動、学びの産官学コンソーシアム活動等を「教育パッケージ」も活用して積極的に推進する。
- 子供の体力や文化認識の向上等に向け、徒歩通学を奨励し、休日部活動の地域クラブ活動移行、地域文化財に関する出前授業等を積極的に推進する。
- 週当たり授業時数の削減等「教員の働き方改革」を推進し、子供と向き合う時間、授業研究、個別最適な授業時間外の学びを推進する。